

いる。この政治制度＝技術観を軸に、ヴェーバーの政治理論を解明し、その射程距離を定めるのが、本書の主要な課題になっている。

「第2次世界大戦後、また各国が一般的に福祉国家の実現を目標として接近を示してからというもの、政党の力学が少くとも特徴として打ち出したことは、これまで選挙民が抱いた忠誠心の有力な動機であったイデオロギー的対立を洗い去ったことである。」これを現代政治の基本的な動向とするレーヴェンシュタインの立場にたつかぎり『支配社会学』、『国家社会学』、『法社会学』などに見られる、あの驚くほど緻密にして雄大な想が、何となく貧相なものとなっても致し方あるまい。しかし、ヴェーバーの政治理論を現代に生かすためには、こうして思い切って棄てる勇気も必要なのだろう。英訳は、Max Weber's Political Ideas in the Perspective of Our Time, 1966. 日本語訳は、得永新太郎訳、『マックス・ヴェーバーと現代政治』(1967)。 (川上源太郎)

## 心理学

### 依田 新著 「性格心理学」(金子書房, 1968)

歳々、心理学を志望する学生の面接試問の際に訊くことであるが、なぜ心理学を専攻しようとするのかと問うと、なかに精神薄弱児のことを勉強して将来は彼らの施設で働きたい、という甚だ殊勝な志しをきくこともあるが、もっとも多い理由は、人間心理に関する科学的知識を得ることができるとおもうから、ということであるようである。まことに尤もな理由というほかはないが、しかしこのような志望が真摯であればあるほど、心理学科に進学した後に感ずる幻滅が、大きいのではないかという懸念をふかくしないわけにはゆかない。それで、人間知を得たいという期待に対して現在の心理学がどれだけ応えることができるかは疑問だから、あまり大きな期待をもってきては困ると、予め予防線を張っておくのであるが、それでも心理学の歩みが迂遠であったり、末梢に捉われていることに失望を感ずる学生は決して稀ではないと推量している。

さて、人間知を得るための心理学は、どのようなアプローチをとったらよいのか。もちろん、どのような心理現象を考察しても、道は人間知に通ずるものといえないことはないが、端的に人間知に迫るコースはパーソナリティ心理学の道であるといえよう。われわれはパーソナリティ研究を通して具体的な人間像を直視することができる筈のものである。パーソナリティの研究は従来“性格心理学”として開拓されてきた。本書の著者依田君はその性格心理学の道を当初から唯一筋に歩んできた本部では類い稀れな専門学者である。

私は依田君とは大学の同窓であった。当時、昭和の初年代は心理学という学問の、一種の転換期ともいえたのであろうか。ドイツではゲシュタルト心理学が隆々と発展を示

し、アメリカでは行動主義の心理学が基礎をかためた時代である。しかしわが学界では、漸くゲシュタルト理論が注目を浴びだしたところであり、行動主義に対してはまだ至って消極的な反応しか呈していなかった。私共も心理学科は卒業してもまだ自分の進路は定まらずという工合で、研究方向についても模索状態にあるのが私たちの姿であった。依田君も本書の“あとがき”に“わたしたちは当時のオーソドキシカルな心理学に不満で、人間を求めて学問的彷徨をした”と記している。しかし“わたしたちが彷徨した花園は性格学でありゲシュタルト心理学であった”と述べており、依田君の人間知を求めての進路はすでに当時から性格学であったことが語られている。またこの著者は大学時代に1人の親友にめぐりあい、手を携えて性格研究にすすむことになるのであるが、わたくしの心理学的生涯はかれなしには考えられない（あとがき）ということになり、大学卒業後15年経って、この親友正木との共著“性格心理学”（昭和15年）が送りだされている。それからさらに30年経た今日、還暦を迎えた著者はそのライフ・ワークの第2の里標として本書を世に問ったわけである。正木君の亡き現在、著者はほとんど唯一の純粋な性格心理学者といえるし、その歩みにはわが学界の性格研究のシンボルといっても過言ではあるまい。

さて本書は、まず性格研究の史的展望からはじまっている。人の相貌に人柄の特徴を発見しようとした相貌学、骨相によって性格を打診しようとした骨相学、あるいは筆跡をみて性格を判じようとした筆跡学などを経て、現代心理学の初期を彩る個人差の研究、無意識界を通じて幼時経験が物をいうという精神分析学、その他ゲシュタルト心理学や目的心理学、人格心理学などで個性というものにどのような関心をむけてきたか、そしてついに1924～1925にG・W・オールポートによってパーソナリティ心理学がハーヴァード大学で講義題目としてとりあげられるまでの経緯が述べられる。

パーソナリティ心理学という新分野の講義を登場させるについては、当時の学界事情からみて、オールポートとしては相当の信念と主張とがなければならなかった事情を著者は語る。それは当時支配的であった普遍的な法則を求める法則定立学としての心理学に対して、個性記述学としてのパーソナリティ心理学の存在理由を説得することであったという。しかし、オールポートがパーソナリティ心理学をもって、それは人間を全体的な統一体であり、それは人間を分析的にみる従来の法則定立的な立場とは対立するといった主張に対しては、その後イギリスのアイゼンクその他の批判が寄せられたことも紹介される。著者はオールポートの学問には特別の親近感と共鳴を感じていることが“あとがき”からも知られるのであるが、同時に著者は心理学におけるパーソナリティ研究のアプローチは多岐にわかれており、したがってその理論も多種提起されていることも指摘している。

ところで、近ごろ心理学では“パーソナリティ”という言葉がしきり登場し、以前の“性格”という言葉が蔽いかくしているようにもみえるが、本書のⅡ章ではパーソナ

リティとは何か、それと性格とはどのような違いがあるかを吟味している。パーソナリティとはもと、ラテン語の“ペルソナ”からきており、それは“仮面”の意味であったこと、その意味がしだいに変化して、有名なセロによれば4通りに使われるようになり、現在もだいたいはその線に沿っていて、ペルソナすなわち仮面を意味する見かけの特徴とか社会的役割をもってパーソナリティとするものがあり、人の性質の総体を意味するものともいわれ、威厳を意味するものともされていることが説かれている。そしてこれについてもオールポートの見解を比較的詳しく紹介しているが、それは生物・社会的な見方に対する生物・物理的な見方のもので、個人の力動的体制であり、環境に対する独自の適応を規定するものという定義に表われている見解である。

他方、性格という概念にもいろいろの解釈のあることが示されているが、著者はパーソナリティと性格とをそうむずかしく区別する必要はないという態度をとっている。

Ⅲ章の性格の表現の問題については、著者は特に“表現の仮面性”ということについて、熱をいれて説いている。性格はパーソナリティの語源である仮面そのものとみてよく、性格の表現的機構は結局のところ仮面的機構に帰するという見解で、著者の研究の伴侶であった正木の“性格とは個性の社会的場における現実的な表現の理解的形態である”という言葉を引き、また著者が調査した青年の日記などを例にとって、その所以を力説している。性格の重要な機構とされている補償的構造すなわち気の弱い人が強がってみせるなども、性格の表現的機構の一側面であるとする。従来の心理学ではパーソナリティの適応的な面を重視し、表現的な面を等閑視していたことに対する著者の抗議がうかがわれ、この点についても表現性の意義を強調したオールポートに共鳴している。

性格ないしパーソナリティを研究する途はいろいろあるにしても、その代表的なものといえば一方に類型論、他方に特性論からの考察をあげることができる。そして類型論に属する考察は欧州、特にドイツから発する伝統的なものともいえ、またクレッチェメルやシェルドンにみられるように精神医学や生物学とも関係がふかいものがあるのに対し、特性論の方は新しく、主としてアメリカで発展され、純粹の心理学畑から提唱されたというような特徴をもっているといえる。本書の著者はその経歴からして、まず類型論的考察の途をふかく踏みしめたのは当然であって、本書でも類型論にはもっとも多く紙数を費して論述されている。

Ⅳ章はこの類型学の論理とその方法を考察したもので、重要な見解が述べられている。法則定立的な心理学は人間をその普遍的・一般性においてとらえようとするから、個性は見捨てられなければならない。他方、個性記述的に人間をその特殊性においてとらえようとするれば、無限に存在する個性をとらえることは不可能に帰する。そこで“普遍”と“個性”との中間において人間をとらえる第3の立場が必要であって、そこに発見されるものが類型であり、この類型を問題にする学問は“個”をなんらかの意味において“普遍”と関係づけることによって“個”を理解しようとするものだ、というので

ある。このような狙いをもつ類型学はどのような方法によって類型をとらえるかといえ  
ば、クレッチュメルのように精神病者と正常者との“中間者”，イェンシュのように意  
識の高層と下層との間の中間者について，類型的・典型的なものを発見しようとするも  
ので，それは分析的に各特性をさがして総合するのではなく，直観的統一的に類型を把  
握することを重視するものとされる。

こうして探究された類型学としてクレッシュメルとシェルドンとの例が紹介される。  
これらの類型論はどの性格心理学にも紹介されているものだが，本書の紹介は要を得し  
ていること，および実験的に探究された類型論を加えてあるのが特色であり，また興味  
もひかれるところである。

他方の特性論は，パーソナリティの全体の特徴を分析的にみて，その全体的な特徴を  
きめる各側面の“特性”を探しだし，それぞれの特性について或る人がどの程度にその  
特性をそえているかをテストし，それらの特性得点を示すことでパーソナリティを表現  
しようとするものである。そのばあい，一般にパーソナリティの特徴を捉えるためには  
どれだけの特性をとりあげればよいかをきめるために，因子分析法などが役だてられ  
る。また，特性には個人的特性の共通な面を示す共通特性，人格の表層にあって，環境  
の影響を比較的うけやすい特性と根源的な特性の区別などが問題になるのであるが，本  
書ではⅦ章で特性論の論理と方法が吟味されている。

さて，性格研究の代表的なアプローチである類型論と特性論とでは，性格の捉え方に  
大きな違いがあるようである。類型論では人間の典型的な類型は2種類ないし3種類の  
ものであるといい，それぞれの類型は統一的な全体的特性をそなえていて，したがって  
Aの類型とBの類型とは別のものであるという見方をしているようである。A類型の人とB類  
型の人とは別のタイプの人であって，その意味で一つの類型と他の類型とは連続しない  
ものとみられる。ところが特性論からみられる性格というのは，共通の特性項目の上で  
測定された得点の分布の違いということになり，人の性格の差は程度の差にすぎないとい  
うことになる。いったいどちらの観点が性格というものの真実を捉えているのであろ  
うかと迷うのである。

この問題は性格学に素人のわたしの疑問であるばかりでなく，著者もまた重要視して  
いることが「まえがき」に記されている。“わたくしの性格心理学は類型学からはじま  
った。クレッチュメルやイェンシュの類型学に興味をひかれて勉強した。そして戦後は  
アメリカの特性論に関心をもたざるを得なかったが，この二つを統合することはなかなか  
困難であった。”この統合の試みはⅥ章の“類型論議”に語られている。類型論の考え  
方にも変化があつてクレッチュメル式のドイツ流の考え方では，人の類型は統一的全体  
をなすもので，一つの典型的類型と他のそれとは互いに異質のものとされるが，シェ  
ルドンにみられるようにアメリカの学者になると，一つの類型と他の類型とは不連続な  
ものではなく，その中間型も存在するとみられるようになり，ついには，類型とは分析的

に捉えられる幾つかの特性の集合から成るパターンに他ならぬと解釈されるようになった、というのである。

このような類型論になると、結局それは特性研究で得られる特性得点をグラフにし、そこに示されるプロフィールのパターンをもって類型とするのであるから、類型論は特性論がどこまで特性研究を基礎にすることになり、両論は対立することはなくなり、一応その統合が可能になったようにもみえ、著者もまたそれを肯定しているようにもみえる。

しかしわたしには、これは擬装の統合にすぎず、根本の問題は解決されていないような疑念が残るのである。特性論が提出する性格特性のプロフィールは多種多様なもので、そのパターンはたしかに連続的なものである。その多種多様なパターンをとって、それをただちに類型としたのでは類型学の意義を失わせてしまうことになるであろう。特性論としてはこの性格特性のプロフィールを得たことで人の性格特徴は理解されたとして満足することができるかもしれないが、類型学としてはそのプロフィールの示すパターンに独自の特質を区別することができなければ、類型を捉えたことにはならないではないか。判り易い例をあげてみよう。三角形は3本の線の長さの関係でいろいろな三角形ができる。三角形の頂点に短い線を挿むことで四角形へ連続的に変りうる。しかしわれわれがその図形パターンを三角形とみるか四角形とみるかは連続的ではない。どこかで三角形の図形パターンは異質な四角形のパターンに変わるのである。修正された見解をとる類型論であっても、性格プロフィールのパターンにこのような特性的パターンを発見する仕事を抱えている点で、依然として特性論とは異なる観点に立つものではないか。

著者もこのようなことはとうに気づいているにちがいないことは、前に引用した“まえがき”の文章につづいて“ある意味では性格心理学は類型論から特性論へと発展したともいえるが、……所詮二つのものは統一されない運命なのかもしれない”と漏されていることから判る。そして、これからの人は自分のようにこの二つの立場の統一というような問題に苦しまないで、もっと新しい立場で性格研究にすすむがよいという意味のことも記されている。

本書にはなお、性格の形成について考察した諸研究の展望、特に性格形成に及ぼす環境の影響については著者の長年の研究を収めた有益な展望があり、そして終章には性格の診断の方法が解説されている。全体を通じて性格心理学の諸問題を判り易く、よくバランスをとって解説してあって、これをもって現代性格学の全貌を知ることができる好著になっている。

ただ望蜀の言葉を附言するとすれば、著者自身の見解ないし諸説に対する評価が、控え目にしか述べられていないのが稍物足りないことである。年功を経たその道の第1人者である著者に、積極的な立言をもって自身の今日到達した見解を披瀝してほしいと望

むのは、決してわたしだけではあるまい。幸いに、“このつぎにはわたくしも新しい構想で別な性格心理学を書いてみたい”とあるからには、是非第3の里標をうちたてて、われわれの人間知を啓発してほしいものである。（さがらもりじ）

## 歴史学

### 新 刊 紹 介

最近出版された書物で、ぼくの読んだもののうち、歴史・経済史関係のもの数冊を紹介したいと思う。まず初めに、ベンジャミン・ファリントン『フランシス・ベーコン—産業科学の哲学者—』（松川七郎，中村恒矩訳，岩波書店）をとりあげたい。ベーコン（1561年—1626年）といえば、誰でもアリストテレス哲学やスコラ哲学の伝統的学問を批判して、実験と観察とを基礎とする帰納的方法によって自然の解明を企てた哲学者を、あるいは人が真理に到達するのを妨げる先入観として「種族の偶像」「洞窟の偶像」「市場の偶像」「劇場の偶像」を指摘した哲学者を思いだすだろう。ベーコンは生前『隨筆集』（初版・1597年，第2版・1612年），『学問の進歩』（1605年），『古代人の英知』（1609年）『大革新』（1620年）を公刊したほか多くの草稿（ことに『ニュー・アトランティス』）を残したが、それらのうち、ファリントンによると、晩年の『大革新』こそはすでにケムブリッジ在学中（12才—15才）からかれの心をとらえて生涯離れることのなかったベーコンの思想を最終的に表明した著述であって、それ以前の諸著書は『大革新』のための準備作業であった。すなわち、ベーコンの計画によると『大革新』は六つの編から成るはずであったが、実際には六つの編のうち第二の「新論理学」（「ノヴム・オルガヌム」）と第三の要約を含むだけの断片に過ぎなかったため、『大革新』と名づけられた書物はその計画の一部分の名、つまり『新論理学』という名でよばれるようになった。ここに重大な歪曲が生じた。すなわち『大革新』は人間社会の全面的な改革を唱道する書物から論理学の書となり、ベーコンは社会の改革者から論理学の改革者へと矮小化させられたのである。本書の著者はこのような見方に立って、『新論理学』を『大変革』の一部として正しく位置づけることにより（第5—8章）、ベーコンの全著作・全思想を再検討し、新しいベーコン像を作りあげようとする。かくして、本書の副題が示すように、著者はベーコンを「産業科学の哲学者」として把握し、その思想を「知識は仕事のなかで結実しなければならないということ、科学は産業に応用されるものでなければならないということ、人は生活の諸条件を改善し変革するための神聖な義務として自分たちを認識しなければならない」という主張にありとする。ベーコンの著作の内在的研究だけでなく、ベーコンの生きた時代に関する最近の歴史学的研究成果や問題意識を正しく摂取したことによって、著者はこのような注目すべき見解に到達したと思われる。